

## 「北村慈郎牧師の裁判から」

2014年08月30日

北村牧師が起こした訴訟に対し、最高裁は6月6日「棄却」の判決を出した。これを受けて、8月28日、紅葉坂教会で「最高裁上告棄却報告集会」が持たれた。

北村牧師は紅葉坂教会の牧師をしていた。聖餐は受洗した者だけが与ることができる(以下クローズド)という習わしであるが、未受洗者でも与ってもよい(以下オープン)のではないかという議論が以前からあった。紅葉坂教会では聖餐式に関する勉強会を繰り返して、総会でオープンを決議し、規則を改正して実施した。日本基督教団の最高会議である常議員会で、北村牧師は求められ、オープンにした経緯を報告した。教団執行部は、オープンが教憲・教規に違反するとして「免職処分」にした。免職は人格権と生存権を奪う最も厳しい処分である。この免職処分は杜撰な手続きで、違法、不当な人権侵害が見られる。教団、教区内で免職撤回の議論が沸騰したが、取り消しを得ることができなかった。

北村牧師は「免職処分の無効と教師の地位確認」を求めて、司法に訴えを起こした。地裁、高裁、最高裁と上告したが、いずれも、宗教教義に関わる問題で、司法が介入すべきではないと「棄却」判決となった。

クローズドかオープンかは宗教上の真理問題で決着がついていない。世界中の教会で議論され、双方の主張がある。聖書本文からは結論を得ることはできないであろう。クローズドにすることを、古代教会で決めたことは確かである。クローズドは教会を守ろうとする立場で、教会熱心党と言えよう。理解できる。私は、主イエスは洗礼を受けていないからと言って、聖餐を受けたい人を拒まれるとは思えない。聖餐の赦しの恵みは、教会の手の中にあるのではなく、求める人々に開かれたものである。主イエスの福音の内実から、それぞれが決断すればよいのではないか。クローズドを認める。しかし、オープンを実行した北村牧師を免職することを認めることはできない。

この問題は、現在の教団執行部の姿勢に関わっている。70年代に教会紛争があった。東京神学大学でも、教授会と学生は激しく対立した。教授会は機動隊を導入して正常化を図った。私は学生から連絡を受け神学校に行き、機動隊員がキャンパスを白い鉄板で囲んでいく状況を、寮の4階のベランダから見た。あつという間にロックアウトされ、その中央にチャペルの十字架が立っていた。あの光景を忘れることはできない。私は無政府主義でも権力を全否定する者でもない。しかし、機動隊(国家権力)によって守られる神学校で、どんな神学が営まれるのだろうかと呼びかけた。

東京神学大学の強い影響を受けている教団執行部は、狭い信仰的真理だけを正当とし、他を厳しく排除する姿勢である。この姿勢は権力を志向するようになる。数を集め政治的に進めようとする。教団総会では、執行部支持者からであろうか、小さなパンフレットが回され、議案も選挙もパンフレットの指示通りに議せられている。信仰者の主体的責任はどこにあるのか。総会は、福音とは何か、その福音に従って、何をなすべきかを神学的に議論する場であろう。北村牧師の一貫して動じない姿勢に敬意を表し、支援を続けたい。支援者は千名を超えた。教団を変えていく道筋になることを心から願う。

教会は主イエスの福音に徹底的に固着し、これを生きる群れである。福音とは「生の絶対的是認」である。全ての人の生を肯定し、受け入れて、共にあることを喜び合う。それは必然的に、生の否定に対し「ノー」を表明することである。